平成29年度　国際交流委員会　活動報告３

名古屋市立大学と東ティモール・パーツ大学との大学間交流協定締結準備

名古屋市立大学看護学部
樋　口　倫　代，嶌　田　理　佳，脇　本　寛　子
金　子　典　代，山　口　知香枝

Ⅰ．はじめに

平成29年度、看護学部から大学間交流協定締結計画書を国際交流センター会議に提出した。これは、看護学部が部局として大学間交流協定締結計画書を提出する初めての機会となった。相手大学は、東ティモールのパーツ大学である。この計画書は、同時に薬学部から提出された台北医学大学（台湾）、マネージメント科学大学（マレーシア）との交流協定締結計画書ともに、2017年12月19日の国際交流センター会議で了承された。締結までには、さらに本学の部局長会議、役員会、理事長承認を経て、両大学で署名を行う必要があるが、これまでの経過と今後の展望を相手大学の概要とともに報告する。

Ⅱ．背　　景

東ティモール民主共和国（以下東ティモール）は、東南アジアに位置し、インドネシアとオーストラリアに挟まれたティモール島にある。面積約15,000㎢（名古屋市の約47倍）、人口約120万人（名古屋市の約半分）、2002年に国連暫定統治から独立した「アジアで最も新しい国」としても知られている。産油国となったこともあり2011年からは「中所得国」に分類されるようになり、保健指標で言えば、独立当初と2015年を比較すると乳児死亡率は出生千に対して77.5から43.9、妊産婦死亡率は出生10万に対して220.0から94.0に改善するなど[1]、独立後の復興・開発はめざましいものの、国連開発計画の人間開発指標では188カ国中133位である[2]。現在も国連の分類で、Least Developed Countries（LDCs）となっている[3]。

Ⅲ．これまでの経緯

看護学部国際交流委員会では、本学では前例がなかったLDCsとの交流を模索することを目的のひとつとして、平成28年度名古屋市立大学特別研究奨励費（区分④：国際交流の推進事業）を得て、３人の教員が平成28年８月21日～25日に以下東ティモールを訪問、11ヶ所の研究教育機関と保健医療施設を回り聞き取りを行った。その結果、独立後まだ間もない東ティモールの状況は、世界や社会と地域のwell-beingとの結びつきを考えさせ、人々の暮らしに資すための学術活動のあり方などについて多くの示唆を与え得る環境であることを確認した[4]。この時の訪問先のひとつであったパーツ大学公衆衛生学部から本学との学術交流への強い関心が示されたため、平成29年３月に教員１名が再渡航、パーツ大学との将来的な学術交流を視野に入れた学部生短期交換研修を行うための準備として、公衆衛生学部長、国際交流担当副学長ら関係者と共に双方の意向と実現可能な計画について確認した。この二度目の訪問中、同大学学長が学部間ではなく名古屋市立大学とパーツ大学の大学間学術交流協定を結ぶことを希望していると伝えられた。

平成29年度には、パーツ大学との学術交流協定を締結するためのさらに具体的な計画を進めることを目的として、再び名古屋市立大学特別研究奨励費（区分⑤：国際交流の推進事業）を得ることができた。先方から大学間交流が希望されていたため、平成29年度の計画には、パーツ大学にも同じ学部のある経済学部と人文社会学部の教員が分担者として加わり、平成29年８月27日～９月２日に看護学部と人文社会科学部から１名ずつ２名の教員が同大を再々訪問した。学長、３人の副学長（学術担当、総務・財務担当、国際担当）、国際リエゾン担当者、及び3学部（公衆衛生学部、人文科学部、経済学部）の教員らと双方における事務的なプロセスや短期計画と目的を確認し合った。経済学部長は不在だったが、経済学部の教員が内容を共有した。この三度目の訪問では、２人の学生が名古屋市立大学の国際看護サークルの活動の一環として自主的に教員と同行、パーツ大学公衆衛生学部の講義やフィールド実習に参加し、パーツ大学の学生たちと交流することができた。（学生のスタディーツアーは別報告を参照）

上述のような活動を経て、看護学部国際交流委員会では、大学間交流協定締結計画書案を平成29年10月３日の看護学部教授会に議案提出、承認され、看護学部から国際交流センター会議への計画書提出となった。

Ⅳ．パーツ大学について

パーツ大学は、2004年に設立された私立大学で、2009

年に国内二番目の教育省認可大学となった。（最初の認可校は国内唯一の国立大学である国立東ティモール大学で、現在の認可大学は３校）。最も古くかつ最大規模の私立の高等教育機関と言える。

同大学は、２つのキャンパスに人文社会科学部、経済学部、法学部、工学部、公衆衛生学部、農業技術学部の６学部14学科と６つの修士プログラムを設置している。現在、工学部を基に技術研究所を設立する準備が進められているとのことであった。教職員数は215名、学部学生12,239名、大学院生147名が在籍している（平成29年８月聞き取り時）。また、これまで農村部でも知識人を育てることができるよう、地方で受けられる授業（パラレルクラス）も開催してきた。地方から中央省庁まで多岐にわたる人づくりに関与しており、例えば公衆衛生学部に関して言えば、私立大学ながら、保健省職員のキャパシティビルディングの一端を担っている。

構成部局としては、上述の学術教育部門に加え、総務・財務部と学生開発部の各部門がある。学長のもとには学術担当、総務・財務担当、人事担当、国際交流担当の４人の副学長が配置されている。また、国際リエゾン担当が置かれ、インドネシアとオーストラリアを中心にフィリピン、マレーシアなどの国外の大学との学術交流をすでに構築しており、地域における国際学術ネットワークのメンバーとなっている。

東ティモールの多くの組織と同様、パーツ大学もハード面、ソフト面において整備途上である。教室などは講義が行える最小限の設備となっていた。公衆衛生学部ではインドネシアの協力大学の支援を得てカリキュラム開発を行い、教材はまだ様々なところからの借用が中心のようであった。そのような中、人材のキャパシティビルディングは大きな課題である。現在の公衆衛生学部長も同学部卒業後請われてそのまま教員になり、その後修士号を取得したというように、教育陣から作りあげている最中であることがうかがわれた。公衆衛生学部教員で博士号取得者は非専任の２名のみで、まだ修士号を取得していないものも多く、修士課程のための留学予定者、留学のための奨学金申請中という教員を抱えていた。教育体制を整えることが優先され、研究はこれからという状況である。

Ⅴ．今後の展望

１．期待される成果と課題

パーツ大学と名古屋市立大学は同様もしくは似通った学部（人文社会科学部、経済学部、工学部、公衆衛生学部）を有している。また、地元の多くの部門に人材を輩出している点も共通点である。名古屋市立大学は、大学として67年の歴史があり、学術開発への長年の経験や貢献に基づくノウハウをパーツ大学と共有し、以って東ティモールの国づくりに資することができる。一方、パーツ大学は、新しくできた国において、限られた資源の中、大学が国づくりや地域開発プロセスに関わりを持っているという経験を本学と共有できる。グローバルとローカルの関係、コミュニティとアカデミアの関係が現在の日本より見えやすい環境であり、それが本学学生にとって学びと刺激になることは、今回同行した学生の報告からもうかがえる。

世界の国家のうち四分の一ほどは、東ティモールを含むLDCsと言われる国々である。多様化しグローバル化する社会に対応できる人材育成が求められる中で、大学教育においても今後これらの国々と無関係ではいられないであろう。しかし、東ティモールは、歴史的に人材の育成や確保に困難のある期間が長かったことや、国として大学教育の経験が長くはないことなどから、パーツ大学を含め、いずれの大学も周辺国と比べても十分な研究・教育を行なえる環境とは残念ながら言い難く、特に研究においては効率的な国際共同研究を推進できる環境ではない。看護職についても、インドネシアやポルトガルなどの関係国からの影響が長く続き、東ティモール独自の専門職としての制度確立や人材育成は途上である。そのような現地の状況から考えると、継続的な関わりが求められ、また、単なる学術交流にとどまるのではなく、人材育成や、地域開発支援に関わることも視野に入れる必要があるだろう。

２．交流目的と計画

パーツ大学側から要望があったように、パーツ大学の複数の学部からの学部生を短期研修で受け入れることから開始するというのが、交流基盤を築く上で現実的であると考える。異なる文化や社会的背景を持った人々と共に活動し、お互いに学びあう機会を提供し、そのことを通じて地域開発における社会的要因を見出す広い視野を養うことを交流計画上の目的としている。その際には、単に先方学生に日本や本学で学んでもらうというのではなく、本学学生にもともに学ぶ機会を提供できるような工夫も行いたい。招へいの資金については、科学技術振興機構の「さくらサイエンスプラン」の活用なども検討している。

パーツ大学と本学の交流基盤が構築された後には、看護学部として、韓国、モンゴル、東ティモールの受け入れと本学学生による４カ国の合同交流プログラムを開始することも構想している。看護学部では平成24年から、本学の大学間交流協定重点校であるハルリム大学の医学部看護学学科と短期交換研修を継続し、やはり大学間交流協定校であるモンゴル国立医科大学看護学部との短期

交換研修の計画も進んでおり、平成30年度には２つの大学から同時に短期研修を受け入れることを準備中である。ここに将来的にパーツ大学も加わることで、背景が異なる学生たちが健康を学び合うことによる相乗効果、および、看護学部学生の広い視野、国際感覚を育成するプログラムとなることが期待できるだろう。

このような学生交流の中で教員同士の交流を積み上げ、将来的にはパーツ大学教員の本学での留学受け入れや、共同研究に発展させることを長期的な目標としたい。

Ⅵ. 謝　　辞

本稿の元となった東ティモールへの渡航滞在は、平成28年度および29年度の名古屋市立大学特別研究奨励費の助成を得て実施している。

1）World Bank Health Nutrition and Population Statistics,
http://databank.worldbank.org/data/reports.aspx?source=health-nutrition-and-population-statistics,
2018. 1. 5.

2）Human Development Report 2016 Team: Human Development Report 2016, 198-201, United Nations Development Programme, New York, 2016.

3）World Bank Country and Lending Groups,
https://datahelpdesk.worldbank.org/knowledgebase/articles/906519-world-bank-country-and-lending-groups,
2018. 1. 5.

4）樋口倫代，嶌田理佳，金子典代，他：平成28年度国際交流委員会活動報告３　東ティモール訪問，名古屋市立大学看護学部紀要，16，59-62，2017.